

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・様々な養育者が参加しやすいように内容を見直し、PR方法などを検討していく必要がある。 ・親子に居心地の良い場となるよう配慮していく。 ・ひろばのスペースが狭く、養育者同士の話し合いや交流する場が十分でない。会場の確保について検討していく必要がある。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。	・親同士、こども同士、さらには世代を超えて交流できる機会を作り、お互いが育ちあい、支え合う場になるようにしていく。	A	B
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。	・居場所に来れない人も含め、区全体の子育て支援ニーズを把握する必要がある。	A	A
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。	・親同士、こども同士、さらには世代を超えて交流できる機会を作り、お互いが育ちあい、支え合う場になるようにしていく。	A	B
☆アクセスの不便な区民も身近に集う場がある。	・拠点が遠くて居場所に来ることができない人へのアプローチを検討する。	A	A

評価の理由(法人)
<p>(主なデータ)</p> <p>・新規登録者数・利用者数・養育者の内訳(母親、父親、祖父母、外国人・プレパパ&プレママ)</p> <hr/> <p>① 「ひろば」(こっころの居場所事業)利用者の増加 施設移転に伴い「ひろば」が広がったことで、利用者(親子、家族、支援者)が増加した。アンケートでもまた来たいという人が99%であった。一方移転前と比べ、丁寧な対応ができず、利用者の不満があることがわかった。スタッフ間で話し合い、こっころだより(拠点通信)でアンケートの声に丁寧に対応し、不安解消に努めた。</p> <p>② 世代を超えた利用者の増加 多言語対応のHPにリニューアルした事で、外国人利用が増加した。母親教室での周知ができた。移転後は入りやすさの工夫により、世代を超えた利用増加につながった。</p> <p>③ 子育てニーズ把握のためのアンケート実施 ひろばやイベントでのアンケート調査実施や、エリア別子育て支援連絡会(以下エリア別連絡会)や教材貸出時に支援者に対し聞き取りをし、結果をHPやひろば掲示などで公表した。</p> <p>④ 利用者が交流し育ちあう場の提供 養育者の不安解消のため、サポーター(子育ての先輩利用者)を導入した。</p> <p>☆ アクセスの不便な利用者へのアプローチ 利用者を身近な地域につなぐため、拠点スタッフが地域へ出向いて収集した情報を提供した。また地域の場で事業展開や子育て情報を提供した。</p>
評価の理由(区)
<p>① 母親教室、商業施設、子育てマップ等、PRの場を広げ、拠点とケアプラザなど関係機関とのつなぎの場を作った。また、区民の声を拠点に伝え、拠点事業に活用できるようにした。</p> <p>② 子育て世代のみでなく、広く区民に拠点の理解を深めるため、多世代への働きかけが必要である。</p> <p>③ 平成24年に実施した区の子育てアンケート(以下子育てアンケート)を拠点と共に分析し、事業改善につなげた。</p> <p>④ 親子の同世代のみでなく、多世代が子育てに関わるしくみづくりが必要と思われる。</p> <p>☆ 拠点から遠い地域の方々には、こっころHPやメール配信のPRをしたり、子育て連絡会や子育てマップなどで身近な居場所を啓発した。</p>

1 親子の居場所事業

拠点事業としての成果と課題

(成果)

移転後、利用説明の工夫、イベント実施、HPのリニューアルをし、利用者の増加、多世代や外国人利用者など、利用者の増加につながった。またエリア別連絡会や外遊び、子育て関連施設への訪問を行い、拠点から遠い地域の親子を利用しやすい身近な地域につなげることができた。アンケートの結果を受け、外遊び等事業企画に反映し、子育ての不安の軽減に努めた。

(課題)

- ・こどもの育ちの場になっているかという視点が必要である。
- ・来ている親子が離れずに常にセットでいる感じが強いので、子同士が親から離れ、自由に関わり合えるような工夫が必要である
- ・こどもが遊び込めるように拠点内にしきりを作るなど、ゾーニングできるとよい。
- ・拠点が保護者のオアシスになるような雰囲気作りが必要である。
- ・一人で入りづらい、スタッフにいてほしいという意見があり、どのようにサポートしていくか検討が必要である。
- ・多世代が子育てに関わり、養育者を支援していく仕組みづくりが必要である。
- ・子育て経験を活かし、親同士が悩みを解決していく仕組みづくりが必要である。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・傾聴を基本としたスタッフ研修を継続して、資質向上を目指す。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。	・専門的な相談があれば関連機関で連携し、効果的に支援できるようにしていく。 ・保土ヶ谷区全体の子育て相談の内容の傾向を把握・分析し、今後の事業に反映させていく。	A	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

相談実施状況、専門相談実施状況、区との連携ケース数

- ① 信頼関係を築くための雰囲気作りと傾聴研修、振り返りミーティングの実施
利用者の相談を丁寧に傾聴し、ともに考えるように努めた。また相談しやすいように雰囲気や気持ちをくみ取った接し方に努めている。毎日、親子への対応について振り返りミーティングを行った。
- ② 専門相談やミニ講座の実施と区や他の関連機関との連携
相談内容により、専門相談につないだ。相談が多い内容については、テーマを決め、利用者同士の座談会を行った。区や関係機関と連携が必要な場合は、速やかに連絡し、対応について話し合った。

評価の理由(区)

- ① 拠点での相談が円滑に行われるよう、必要な情報を提供した。
- ② 養育支援が必要な場合は、個別ケース検討会議に参加してもらうなど、支援の方向性を確認したり、関係機関とのつなぎを行った。子育てアンケートや事業で把握したニーズを拠点に伝え、事業展開につなげた。拠点と区の情報共有はされているが、個人情報の共有の仕方が課題である。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・専門相談が充実し、必要な時は専門相談につなぐことで、利用者の不安解消につながった。
- ・連携が必要なケースについては、区に相談し継続支援することができている。

(課題)

- ・拠点の相談機能として、イニシアチブを持って拠点のネットワークを用いて支援していく必要がある。
- ・傾聴で解決できるケースと区へつなぐケースの間に拠点の働きがあるとよい。
- ・養育者の悩みに寄り添い、子どもへの対応の仕方について継続して考えていく必要がある。
- ・利用者どうして悩みを共有し、解消できるようなくみづくりも必要である。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・ネットワークをさらに広げ、幅広く地域の子育て情報の収集・提供を行う。 ・来所者が困難な方に向けて、様々な媒体を使い情報を発信していく。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。	・ネットワークをさらに広げ、幅広く地域の子育て情報の収集・提供を行う。	B	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。	・利用者同士が拠点を使って情報交換できる仕組みを充実していく。	B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)ホームページアクセス数、ほどぴよメール会員数・情報数

①・② 様々な媒体を使った情報収集・提供方法

様々な媒体(HP、ほどぴよメールなど)を使い、拠点内に限らず、拠点利用が困難な利用者にも子育て情報が届くように発信し、区界に住む利用者向けには、隣接区の情報も設置した。

② 広く区民に向けて子育て情報を発信

支援者にはエリア別連絡会で拠点が情報収集、提供の場であることを伝え、協力を得たが、広く区民に認知されているかの検証はできていない。

③ 利用者同士の情報交換の方法

ぱままぼーどや交換ノートを設置し、利用者同士が身近な地域の口コミ情報を交換できるような仕組みを作った。また、エリア別連絡会で支援者同士の情報交換を行った。

評価の理由(区)

① エリア別連絡会や主任児童委員会、ケアプラザ、保育園、母親教室などで拠点をPRする場をつくった。

② 区と商業施設、拠点が共催でイベントを開催し、広報に事業を掲載するなど、広く区民に対し情報提供を行うことができたが、さらに周知方法を検討する必要がある。

③ 利用者が情報収集や発信するなど、拠点事業に関わる仕組みづくりを今後も考えていく必要がある。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・情報掲示の仕方を工夫し、日々更新したことで、情報が得やすいと利用者の満足が得られている。
- ・関係機関から情報が集まるようになり、提供する情報が増えた。

(課題)

- ・広場でこどもを見ながら掲示している情報をゆっくり見れるような雰囲気づくりが必要である。
- ・様々な場で拠点が子育て情報の収集、発信の場であることを伝えていく必要がある。
- ・利用者が情報収集や発信に積極的に関われるように、検討していく必要がある。
- ・情報が少ない障害児や多胎児、シングルマザーなどの情報も収集し、提供していく必要がある。
- ・ホームページをもう少し見やすいように改善する必要がある。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで築いてきたネットワークを広げ、強化していく。 ・子育て支援連絡会が、ネットワークの基盤として機能するよう、連絡会の充実に向けあり方を見直す。 ・保土ケ谷区全体の子育て家庭の支援ニーズをしっかりと把握する。 	A	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。	<ul style="list-style-type: none"> ・区民の身近なところで子育て支援が受けられるよう、ネットワークを使って地域の子育て支援活動を活性化させる。 	B	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)子育て支援連絡会の実施回数、参加者数

① ネットワークの成果とニーズ把握

エリア別連絡会の参加者が増え、話し合いを重ねたことでエリア毎の課題抽出や取り組みにつなげることができた。また子育てマップの作成や各エリアの取り組みの中でお互いの機能を知ることができた。子育てアンケートの結果をエリア別連絡会で伝え、子育てニーズに合わせたイベント企画に活かした。

② 地域の子育て関連施設への訪問

子育て関連施設に拠点スタッフが出向いて情報収集した上で、地域の身近な情報を伝え、利用につなげることができた。

小・中学校、障がい児、世代を超えたネットワークが必要である。

評価の理由(区)

① エリア別連絡会を拠点とともに開催し、子育て支援関係者のつながりを強化した。また、子育てアンケートの結果を連絡会で共有することができた。

② 子育て中の親子が身近な地域の支援につようながる支援者とともに取り組んだ。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・5年前は子育て連絡会3回のみであったが、現在は子育て連絡会2回に加え、エリア別連絡会を7エリア計28回で開催することができている、昨年度から学校、児童相談所を入れ、虐待防止連絡会に発展しているエリアが4エリアある。

・気になる親子や不適切な養育について、話題にできるような関係性をつくることができている。

・連絡会のなかで、外遊びや育児講座等、地域の課題解決への取り組みを行っている。

・エリアの関係機関で協力し、親子の身近な地域での支援につなげることができている。

(課題)

・世代を超えたネットワークづくりが課題。子育ての課題を地域の関係機関で話し合える関係づくりを継続していく。

・虐待予防の観点からも、相談の入り口となる拠点がネットワークを生かし、どこまで支援していけるかを協議し、すすめることが望ましい。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができています。	・地域で子育てに関する支援を行う人・団体等のニーズを把握し、地域で活動できるボランティアを育成していく。	A	B
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。	様々な世代のボランティアの定着に向けて、仕組みづくりを検討する。 拠点に来られない子育て支援者への活動支援の仕組みを検討していく。	A	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		B	B
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ) ボランティア、サポーター、こころクラブの登録者数、活動数、支援者教材の貸出数
① 利用者同士をつなぐための支援 エリア別連絡会で支援者同士がそれぞれの特性を活かした活動ができるよう支援し、外あそびやひろばなど、ボランティア、サポーターが活動できる場を増やした。また、ボランティア育成機関との会議から講座を実施し、ボランティアを地域へつなげた。
② 養育者の活動の場 親が特技を活かせる場をつくり、さらには地域にもつなげる支援をした。また、親子サークルやパパサークルが継続的に活動できるよう支援を行った。
③ 子育て関連以外の会議や連絡会への参加 エリア別連絡会で地域での子育て支援関係者のつながりができた。今後は子育て関係以外の会議の場にも出向き、様々な場で子育て支援の大切さを伝えていく必要がある。
④ 学生やプレパパ、プレママの見学や実習 区の母親教室に出向き、子育て不安の解消の場となるよう、拠点の説明を行い、見学を勧めて利用につなげた。また、高校生、大学生のボランティアを受け入れ、子育て体験ができる場を提供した。

評価の理由(区)

① エリア別連絡会を開催し、支援者どうしをつないだ。区の事業や子育てアンケートで把握したニーズを伝えた。
②、③新たな支援者を増やすため、拠点の事業のPRをしているが、今後も広く区民が子育てを見守るしくみづくりが必要。
④ 妊娠期から拠点を利用できるようPRをしているが、継続した呼びかけが必要。

拠点事業としての成果と課題

(成果) 子育て支援の課題を伝え、活動が定着するための支援をした。ボランティア講座開催し、ボランティアやサポーターの活動が増え、当事者が活動できる場も作る事ができた。
(課題) ・より多くの世代に向けて子育て支援の大切さを伝え、子育てを見守る人を増やしていく。支援者を増やし、養育者自身も子育て支援に関わっていけるような仕組みづくりを進めていく。 ・プレパパ、プレママに対する体験型の支援が重要である。気軽な相談の場として活用できることが望ましい。 ・妊娠期より以前の学生の育児体験も大切なので、定着するための工夫をしていけると良い。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	子育てサポートシステムの活動を区民に伝える為にさまざまな広報活動の必要がある。	B	B
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。	入会説明会の開催と共にひろば利用時にも気軽に説明できることを周知していく。	A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。	研修会、交流会など会員同志が活動時の状況を話し合える場を設定していく。	A	A
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。	養育者にとって必要な支援を聞き取るためのしくみを作っていく。	A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

・会員数、活動件数、区外利用状況、年齢別活動延べ数、活動内容別件数、会員種別内訳

① 広い範囲での広報活動

HPや会報誌、様々な会議、子育て関連施設などに参加して子育てサポートシステムの主旨やしくみを伝えた。

利用者には、ひろばスタッフが傾聴する中で必要時いつでも子育てサポートシステムの説明をした。

② 利用しやすくなるためのさまざまな仕組み

定期的な入会説明会、個別にも対応して説明会を実施し、必要時に子育てサポートシステムの利用ができるようにした。また、預け預かることへの不安を軽減するためのお試し預かり、ひろば預かりのしくみを作り、実施した。

③ 活動しやすくなる仕組み

会員が活動が継続できるよう、会員同士の交流の場や個別対応できる場を作った。

④ 養育者からの丁寧な聞き取り

より効果的な情報を伝えるために傾聴を心がけ、必要な情報(子育てサロン、親と子のつどいの広場、各ヶアプラザの子育て広場など)を伝えた。隣接区に近い会員へは他区の利用を勧めた。

評価の理由(区)

① 赤ちゃん教室など機会を通じて子育てサポートシステムの周知を行った。

② 拠点職員が直接事業の紹介ができる場の設定を行った。

③ 必要に応じて子育て支援に関する情報提供をしている

④ 必要に応じ、相談内容の共有や関係機関につなぎを行っている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・拠点に移管された事で、ひろば・HP・会報誌・他の周知活動から会員が増えた。ひろば預かりを実施することで、預けることへの不安解消につながり、登録につながった。

(課題)

・拠点に来れない利用者にも出張説明会など周知活動をしていく事で、会員登録につなげる必要がある。

・地域により会員種別に偏りがあるため、コーディネートの結果、活動につながらない提供会員には、他のさまざまな活動を提案していく。

・提供会員のサポートの質を担保していくことが必要である。

・親がリフレッシュで利用することを躊躇しないような啓発が必要である。

・障害児の利用の需要があるので、可能な限り受け入れしていけるよう提供会員への啓発等の取り組みが市として必要である。

協働事業プロセス相互検証シート

1 事業計画段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

個々の事業目的はともに確認してきた。区の子育て支援の取り組みの全体のなかでの拠点事業の位置づけを共有をしていく必要がある。

【今後改善が必要と思われること】

区政運営方針のもと、拠点が行う子育て支援の方向性について、アンケートの実施結果などを踏まえ、計画段階から話し合っていく必要がある。

2 事業実施段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

事業の実施や、進捗状況、課題については、定例会で共有し検討することができている。

【今後改善が必要と思われること】

事業の評価は四半期で行うなど、事業評価の時期、事業終了後のあり方、また、定例会のあり方について検討を行っていきたい。

3 事業の振り返り段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

法人と区の役割や事業の目的を確認することによって、双方の強みを活かした事業を実施することができた。

【今後改善が必要と思われること】

協働することでのメリットをさらに高め、子育て家庭や子育て支援に関わる利用者の満足度を上げていくことが必要である。